学生、保護者、教職員の皆様

令和 4 年 9 月

IR センター

教学 IR 情報の分析結果と本学の取り組みについて

川村学園女子大学は、学生の皆さんの大学での学修や生活について、さまざまな調査を行い、設定された目標に向けて学修がどのように進められているか、また学生の皆さんの大学生活が有意義で満足できるものになっているかを検証しています。今回、IR（Institutional Research）センターがその検証結果の中から、学生生活アンケートとアセスメント・テストの分析結果を報告することになりました。このような教学 IR 情報の検証結果を活用して、大学の教育活動や学生さんの学修や生活が、より有意義で満足できるものなるように、大学も取り組んでいます。いくつかの取り組みの事例も紹介いたします。

（１）学生生活アンケートの分析結果

まず、毎年実施されている学生生活アンケートの中から、学修時間、学習行動、満足度についての分析結果を報告します。

1-1. 学修時間の増加

2021 年度の学生生活アンケート（回答率 50.5%）では、「授業に関わる学修時間」が週に『５時間以上』の学生は 37.0％となり、前年(2020 年度)31.2％に対して 5.8 ポイント増加しました。この結果は、遠隔授業の影響も考えられますが、「それ以外の学修時間」でも『3 時間以上』が、 前年(2020 年度)は 18.2%でしたが、2021 年度は 20.1%と 1.9 ポイント増加しました。学修時間が前年より増加傾向であることは、一定の成果であると考えられます。

1-2. 学修行動（学修への取り組み）

学修への取り組みでは、「授業には、必要な予習や復習を したうえでのぞんでいる」学生は全体の 40％でした。また、「大学の友人同士で授業の予習復習や分からないところを勉強している」学生も 39%でした。一方、レポートや課題は満足のいくように仕上げるなど、な るべく良い成績を取るようにしている」の回答結果は、「あて

はまる」「ややあてはま る」を合わせて 15%程度が肯定的でした。学修への取り組みは適切な学生も見られますが、より積極的な学修行動が期待されます。

1-3. 満足度

2018 年度に入学した学生の 4 年間の追跡調査の結果では、大学生活への満足度は学年が進むにつれて上昇していました。また、2021 年度の各学年の満足度の比較でも、上の学年ほど満足度が高くなっていました（詳しくは、IR センターのホームページをご覧ください）。上級学年になるほど、ゼミなどの少人数授業が増え、また教員や他の学生と交流も増えるためではないかと考えられます。

1-4. 教学 IR を踏まえた本学の取り組み事例

本学の大学としてのいくつかの取り組みも、上のような分析結果に関連しています。最近の本学の取り組みとしては、遠隔教育、デジタル教育の導入が挙げられます。

2019 年度までの学生生活アンケートの分析では、学修時間が十分ではないことが IR センターによる分析結果として大学の IR 委員会に報告されていました。これを受けて、教学マネジメント会議は、学生の自発的な学修を促すために、予習や復習に活用できる情報機器の導入を計画しました（2019 年度）。この計画をもとに、2020 年度には ICT 支援委員会が設置されて、2021 年度から iPad を新入生全員に貸与することが決められました。この時期に偶然に重なったコロナ禍のために、本学では遠隔教育（オンライン授業）の体制が整えられ、教育学修活動が継続されました。

対面授業が再開された現在も、多様な情報ソースの活用や双方向学習などにデジタル機器が活用されるようになりました。その結果については随時、学生アンケートが実施されて、教育活動の改善がさらに進められています。

（２）アセスメント・テスト（PROG）の分析結果

本学が現在採用しているアセスメント・テスト（PROG）は、学生の一般的な知的技能（ジェネリックスキル）を測定するテストで、問題解決力と言語・非言語処理能力を測る「リテラシー」と、社会的スキル（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）を測る「コンピテンシー」から構成されています。今回、2020 年度入学者の 1 年次と 3 年次の分析結果から、２年間の学修の成果が検証されました。

2-1. リテラシー（問題解決力、言語・非言語処理能力）

1 年次と 3 年次の PROG 得点を比較すると、リテラシーでは構想力、言語処理能力、非言語処理能力は、3 年次のほうが高いことが示されました。しかし、情報収集力、情報分析力、課題発見力は、1 年次のほうが高い結果でした。この結果は、言語･非言語処理能力については、２年間の学修が一般的な知的技能を高めていたこと示していますが、情報収集力、情報分析力、課題発見力については不十分であったことを示唆しています。

2-2. コンピテンシー（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）

コンピテンシーでは、対人基礎力は 1 年次のほうが 高く、対課題基礎力は 3 年次が高くなる傾向がありましたが、対自己基礎力は、1 年次と 3 年次で 大きな違いがないことが示されました。課題について取り組む姿勢には学修成果が認められましたが、対人･ 対自己については問題が残りました。

2-3. 本学の取り組みと教学 IR

本学は、学位授与の方針（ディプロマ･ ポリシー）を掲げて教育活動を展開しています。今回の教学 IR の分析結果をもとに、ディプロマ･ ポリシーに基づいた取り組みが検証されています。

リテラシーは、ディプロマ･ ポリシー1「幅広い理解 言語的 理解と表現」、ディプロマ･ ポリシー2「専門知識 方法の理解 分析と思考力」に対応する ものです。本学は言語的理解と表現を育成するために、2020 年度入学者選抜から小論文や記述式の導入を進めるとともに、小論文を評価するルーブリックを活用してきました。今回、1 年次（2020 年度）とその 2 年後である 3 年次を比較した結果からは構想力、言語処理能力、非言語処理能力は 3 年次のほうが高い結果が示されたことから、ディプロマ･ ポリシー1 と 2 の一部は、ある程度達成されているものと考えられます。しかし、情報収集力、情報分析力、課題発見力は低下傾向であり、ディプロマ･ ポリシー2 の中でも、分析と思考力の学修が不十分である可能性があると思われます。

また、コンピテンシーは、ディプロマ･ ポリシー3「主体性 協働 社会規範」に対応するもので、対人 基礎力が 1 年次で高く、一方、対課題基礎力は 3 年次が高くなる傾向があること、対自己基 礎力は 1 年次と 3 年次で大きな違いがない結果が示されたことから、ディプロマ･ ポリシー 3 は、主体性と協働を中心に今後さらなる学修達成が課題と考えられます。

以上の分析は、IR 委員会に報告され、さらに教学マネジメント会議で対応策が検討されました。この検討を受けて、FD 委員会（Faculty Development）では教職員の研修が計画され、対応策を具体的に進めています。

（３）まとめに代えて

IR センターで行われている教学 IR 情報の分析は、学長を中心とする IR 委員会で検討されて、さらに学長が議長となる教学マネジメント会議で具体的な対応策が検討され実行に移されてきました。今回の分析結果も、対応策の立案、実行、検証と活用（PDCA）という一連の流れの中で、活用されています。今後も、この一連の過程で、本学の教育と学生の学修がより充実したものになるように、大学全体が取り組んで参ります。